



Vol.39

机の上の小さな変革



順番の作用

こんにちは、菅俊一です。今回は、「順番」について、みなさんと考えてみたいと思います。

たとえば「手を洗う」という行為を見てみると、詳細は人によって異なると思いますが、大まかには「手を濡らす→石鹸をつけて汚れを落とす→水で流す→タオルで拭く」という流れをたどるはず。行為における順番とは動作の前後関係であるため、直前に行なった動作が後から行なう動作と深く関係しています。ですから、先ほどの「手を洗う」行為の順番を一部入れ替えて「手を濡らす→タオルで拭く→水で流す→石鹸をつけて汚れを落とす」という順番にしてみると、手に泡がついた状態のままになってしまい、「手を洗う」という行為は完結しなくなってしまうわけです。

ここまでの話は、わざわざ考えるまでもないと思いますが、重要なのは、普段私たちが「手を洗う」と一言で語る行為のなかには動作の流れがあり、その順番は変更されることがない前提で組み立てられているということです。

では、順番の違いは結果にどのように影響するのでしょうか。実際にやってみましょう。紙（2枚）とペンを用意してから、次の指示に従ってみてください。

まず、紙の真真中に丸を書いてください。次に、その丸の中にA・B・C・D・Eの文字を書いてみましょう。それができたら、次にもう1枚の紙を取り出して、まずA・B・C・D・Eの文字を書いてから、それらを囲むよ

うに1つ丸を書いてみてください。

全体像が先か、要素が先か……

さて、いまみなさんの目の前には、書く順番を入れ替えた2枚の紙がありますが、比べてみるとどのような違いがあるでしょうか。ちなみに私の場合は、最初よりも後で書いた丸のほうが大きいサイズになりました。実際に書いているときのことを思い出してみると、最初に全体のフレームを決めてしまい、中身を後からそのフレームのなかに収めようとするのと、最初にまず中身を決めてから、それらが成立するように全体像を決めるときとは、辻褄の合わせ方が違ってきます。

このようなことは、実際にプロジェクトを立ち上げて実行する際にもよく起こります。プロジェクトの全体像を最初に描けると、これから自分が何をすればよいかは明確になりますが、全体の規模は最初の構想を超えることはありません。

一方で、個々の要素を揃えてから全体像をつくろうとすると時間や労力はかかりますが、構想の規模はそもそも想定していなかったため、結果として最初に想定するよりも大きな規模になる可能性があります。

私たちは順番の力を利用することで、プロジェクト全体の進め方や構想の規模さえもデザインすることができるのです。



PROFILE 菅 俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンデコノミクス』など。